

中山勝博さんの思い出

河村善也*

私が中山勝博さんの訃報を知ったのは、中山さんが亡くなられた翌日のことでした。京都大学のアフリカ調査隊（通称石田隊）のルートからと島根大学地球資源環境学科の学科長の小室裕明さんからの電子メールでその悲しい知らせが私の手元に届いたのです。電子メールの文面を見て、ほんとうに驚くとともに、何かの間違いではないだろうか、そうあって欲しいと願うばかりでした。事故に遭われた場所は、私も20年ほど前に石田隊のメンバーとしてケニアに行ったときに何度も通っている場所なので、だいたいのどのような所かはわかっていました。そこはケニアの幹線道路で、当時も大型のタンクローリーやマタトゥーという乗り合いバスのようなトラックがたくさん走っていて、それを追い抜くときにヒヤッとすることが何度もあったことをつい思い出してしまいました。電子メールの文面では沢田順弘さんたち石田隊のメンバー何人かと奥様、お子様がすぐ現地に向かわれるとのことでした。石田隊ルートの連絡は、名城大学の牧野内 猛さんからもらっていたので、そちらに連絡して相談してみましたが、とにかく遠い外国のことで状況もよくわからずどうしようもないので、次の連絡が来るのを待ちましようということになりました。私は、そのあとすぐに中国へ出張することになっていましたので、中山さんのことを気にしつつ中国へ旅立ったのです。

中国から帰ったときにはもうすでに葬儀やお別れ会などはすべて終わっていましたので、私は中山さんのお宅に弔問に訪れ、奥様やご家族にお会いしていろいろお話を聞くことができました。奥様やご家族の皆様が元気で頑張っている様子を見て一安心しましたが、中山さんの遺影や遺骨を前にしてもこの現実をなかなか実感することができず、今でも元気な中山さんが玄関から「ようこそ」と言って入って来そうな気がしてなりません。名古屋に帰って、中山さんの関係の資料をいろいろ引っ張り出してそれを読んでいると、いろいろな思い出が次から次へと出てきました。中山さんとはフィールドの行き帰りやフィールドを歩きながら、また私の研究室や中山さんのお部屋で、それに名古屋の飲み屋で実によく語り合ったものです。それがつい昨日のように思い出されます。私の古くからの友人で島根大学の高須 晃さんから追悼文の依頼を受けたとき、私は喜んで書かせてもらうとお答えしました。学生時代からの中山さんを知っている私が筆を執って、素晴らしい教育者・研究者であった中山さん、私の良き友人で共同研究者でもあった中山さん、家族思いの優しい夫でもあった中山さんについて、私の知っていることをできるだけたくさん書いておきたいと思ったからです。

授業料返せ

私が今いる大学に赴任したのは、中山さんが3年生から4年生になったときです。本人からよく聞いた話を紹介しますと、中山さんはある大学の理学部の地学系学科の受験に失敗して、第二希望の大学に入学したとのことでした。当時は共通一次試験とかセンター試験というものがなく、国立大学は一期校、二期校の2つに分けられていて、一期校がダメだった人は二期校に再挑戦するということが多かったので、名古屋人の中山さんは2回目に地元の大学を選んだようです。教員養成大学には学科というものはなく、小・中学校や高校の教科に合わせて理科というユニットがあって、中山さんは当然その中の地学を選んで入学しました。

*愛知教育大学地学教室

大学は第二志望でしたが、それなりに期待していた中山さんは、自分の専門の授業には大いにかっかりさせられたということです。ある教官は、授業に内容がない上に授業をよくサボる（休講にする）ので、ついに頭にきた中山さんはその教官のところに「そんな授業をやるのだったら授業料を返せ」と言いに行ったそうです。また別の教官はおよそ時代遅れで無意味な実験を延々とやらせるので、頭にきた中山さんは授業の途中に出て行ってしまったそうです。そうしたら、およそ人を叱る資格などない人物なのに中山さんと呼ばれて、これまた延々と説教をしたのだそうです。これにもほんとうに頭にきたということです。

教官がサボれば喜ぶ、言われたことをただ機械のように延々とやり続ける、そんな情けない一部の学生にも、それをいいことに口先でもっともらしいことを言い、何の反省もしない一部の教官にも、中山さんはほんとうに腹が立っていたのでしょう。

鳥根大学の中山さんの同僚には私の友人や先輩がたくさんおられて、中山さんが赴任された後、中山さんのことを聞く機会が何度もありました。そんなときに皆さんが口をそろえて言われることは、中山さんはほんとうに教育熱心だと言うことです。そのことは「地質学会ニュース」第4巻第11号の沢田順弘さんの追悼文や「そくほう」第562号に載っている多くの方の追悼文にも書かれていることです。大学人として一流の研究者であった中山さんが一流の教育者でもあったということは、多くの人の認めることです。研究に熱心な人は教育をサボるということをしきりに言う人がいますが、そのような人はどちらもサボっている人で、単に研究や教育をやっている「ふり」をしているだけだと思えてなりません。私の知っている限り、中山さんのようにほんとうの意味で真剣に研究に取り組んでいる人は、教育にもほんとうに熱心なのです。

中山さんの教育に対する姿勢やその熱心さは中山さん自身の優れた資質によるところも大きいのですが、本人の口から何度も聞かされた学生時代の経験もその土台になっていると思えてなりません。無内容な口先だけの「教育」ではなく、ほんとうの意味での大学教育を中山さんは目指していたと私は確信しています。

教員時代の中山さん

中山さんの実家は名古屋駅から北へ4 kmほどの所で、名古屋市を流れる庄内川のすぐ近くでした。中山さんは1981年3月に大学を卒業されるとすぐ、実家の近くにある名古屋市立西養護学校に勤められることになり、そこではたしか、中学の年齢の子供たちを教えておられたと記憶しています。学校では授業や事務的な仕事を決して手抜きすることなく器用にこなされた上に、卒業論文以来やってこられた名古屋市東南部や豊田市とその周辺に分布する鮮新世の瀬戸層群（東海層群）という地層の研究を少しずつ進めておられました。また、中山さんは、同じ瀬戸層群でも岐阜県東濃地域に分布するものを研究するために組織された陶土団体研究グループに学生の頃から参加していて、この頃にはすでにその中心的メンバーとして活躍しておられました。そのようなことから中山さんは、同様の地層を研究していた私の研究室に來られて、いろいろなお話しをする機会がしばしばありました。また、私が中山さん率いる陶土団体研究グループの調査に参加させてもらって、一緒にフィールドを歩いたこともありました。その頃中山さんは、私のことを「河村先生」と呼んでいましたが、それは中山さんが学生だった最後の年に私が教官だったからで、その後中山さんと共同研究をするようになってからは「河村さん」という呼び名に変わりました。このように中山さんが西養護学校の教員として超人的な活躍をされていたとき、そこに障害児の音楽療法をテーマにした卒業論文のデータ収集に來られたのが、奥様の邦代さんだったのです。研究者が大きく成長するかどうかは、その家庭、特に奥様の理解と支えにかかっていると私は思います。中山さんが後に大きく成長され、一流の研究者・教育者となられたということは、中山さんにとって奥様がいかにすばらしい方であったのかということを確認していると私は思います。

さて、研究に情熱を燃やし続けていた中山さんは、少しでも研究条件をよくするため試験を受けて高校教

員になるという道を選ばれ、1984年の4月からは同じ名古屋市立の富田高校の教員になりました。富田高校は、中山さんの言によれば、名古屋市立の普通高校のいわゆる受験ランキングでは最低クラスに入ることでしたが、そこでも中山さんは持ち前のパワーを発揮し、授業や事務的な仕事を器用にこなされた上にクラブ活動(天文部)の指導にも熱心に取り組まれました。その結果、天文部は名古屋市科学館の科学工作コンクールにプラネタリウムなどの作品を出品し、数々の賞を受賞したとのこと。中山さんはその指導の過程を論文にまとめられて「地学教育」の第42巻第2号に発表していますが、何事もいいかげんにしないという中山さんのすごさには今でもただ驚くばかりです。しかも、その間にも名古屋市周辺の瀬戸層群の研究や、陶土団体研究グループの組織運営と研究活動を着実に進められていたわけですから、ほんとうに驚きです。さらに私と一緒に奈良市～京都府南部の奈良丘陵を歩き出したのもその頃なのです。

1990年4月には、中山さんは本人の希望により名古屋市立第二工業高校(定時制)へ転勤されました。この学校も中山さんの言によればいわゆるランキングが名古屋市立の普通高校以外の高校で最低クラスだそうで、とても普通の授業ができる状況ではなかったようです。なぜ中山さんはわざわざそこを選ばれたのでしょうか。中山さんの答えは明解で、そこが夜間に授業を行うからだということでした。つまり、昼間の高校では授業終了後に延々と会議を行うので、研究時間を平日に取るのは難しい。それに対して夜間の高校では午後3時に出勤し、夕方授業が始まるまでにはかならず会議は終わるので、平日の午前の時間は研究に当てられるというものでした。博士論文をまとめる時期にさしかかっていた中山さんにとって、少しでも研究時間が欲しかったのでしょう。奈良丘陵の研究と一緒にやり、中山さんと会う機会も多くなった私に、中山さんの研究に対する情熱がひしひしと伝わってきたのもこの頃のことです。

歩く名古屋辞典

Walking dictionaryという言葉がありますが、中山さんは生まれてから松江に移るまでの34年間はずっと名古屋に住んでいたという生粋の名古屋人で、名古屋を愛し、名古屋のことなら何でもよく知っていました。よそ者の私が名古屋に移り住んで間もない頃には、名古屋についてわからないことがあると「歩く名古屋辞典」の中山さんによくたずねたものです。中山さんは松江の街も大好きだったようですが、名古屋と比較して一つダメなことがあると言っていました。それは松江の「殿様商法」で、競争がないから何でも高い、あんなやり方をしていたら名古屋ではとっくの昔にお客がいなくなって倒産しているというものでした。

「歩く名古屋辞典」の中山さんには、名古屋のレストランや飲み屋のこと、ペット屋のこと、当時は珍しかったリサイクルショップのこと、名古屋市内の混雑時の抜け道や近道のこと、などなど実の多くのことを教えてもらいました。中山さんが松江に移られる少し前のことですが、中山さんと奥様とお子様、それに私とその家族で中山さんのよく知っている名古屋・栄の台湾料理のレストランに行って一緒に夕食を食べたことがあります。そのときの料理がとてもおいしく、楽しい時間を過ごせたことは今でもよく覚えています。これも名古屋を知り尽くした中山さんのおかげだと今更ながら感謝しています。また、奈良丘陵のフィールドに車で行くとき、中山さんの実家の近くの庄内川の堤防道路を通過して高速道路に入ると、名古屋駅周辺を通るのに比べて1/2程度の時間で行けるということも教わり、今でもその道をよく利用しています。

矢田川の足跡化石

1990年10月、第二工業高校に勤め始めて間もない頃の中山さんから電話をもらいました。名古屋の東にある尾張旭市の矢田川河床で足跡化石を見つけたので、一緒に見に行かないかというものでした。その前々年には滋賀県甲西町の野洲川河床で多数の哺乳類の足跡化石が見つかり、その次の年にかけて大規模な発掘調査が行われてマスコミでも大きく取り上げられていましたが、野洲川の古琵琶湖層群と堆積環境が似た瀬

戸層群のどこかにもこれと同じようなものがあるはずだと考えた中山さんは、自分の調査地域にもそれらしいものがないかと捜していたようです。中山さんの予想は的中して、ついに哺乳類の足跡化石が見つかったのです。平日でも午前中はフィールドに出られるという中山さんと一緒に、私はその場所を見に行ったのを今でもよく覚えています。そこでは、河床に露出した砂泥互層の地層面に中山さんが言ったように、シカなどの偶蹄類がつけたと思われる足跡がついていました（当時中山さんが撮影した写真が私の手元に残っていました：右の写真）。早速私は現場で簡単な測量をし、中山さんが柱状図を作った後、二人でこれ以外に足跡がないか捜してみましたが、残念ながら現場は河床が狭く、これ以外にはっきりしたものを見つけることはできませんでした。そのため、この中山さんの発見はその後ついに日の目を見ることなく、そのままになってしまいました。後年、中山さんがケニアで哺乳類化石とそれを含む堆積物の関係に興味を持って研究を行っていたという話を石田隊の方から聞きましたが、そのような研究の原点はこの化石にあるのかも知れないと私は思っています。

中山さんは、この例のように自分で予想を立てて、フィールドを丹念に歩き、何か面白いものを見つけてくるという特技の持ち主でした。それは、中山さんがフィールドをくまなく歩き、露頭を徹底的に観察するという研究手法を取っていたことによって生まれたものだと思います。中山さんはフィールド調査のおもしろさをこのようなところにも見いだして、それを後進の学生に何とか伝えたいといつも願っていたのではないのでしょうか。

INQUA の国際会議

1991年8月に北京の国際会議センターでINQUA（国際第四紀学連合）の第18回大会が開かれました。この大会には中山さんも私も参加しましたが、当時は定時制高校の教員だった中山さんが国際会議に参加するのは本当にたいへんだったと思います。しかし、会場で出会った中山さんはいつもの元気な中山さんで（写真）、その直前に行ってきた巡検（野外での見学旅行）のことを熱っぽく語ってくれました。中山さんが行ってきたのは、この国際会議の一環として企画された多くの巡検の一つで、中国陝西省、山西省、河北省を巡る11日間のコースで、中国北部に発達する黄土と河成・湖成堆積物の代表的な露頭を観察するのが目的でした。この巡検については中山さん自身が「第四紀研究」第31巻第1号にその報告を書いておられます。私はすでに、1983年に中国黄土から産出する哺乳類化石の研究のため、中国に行っていて中山さんが行かれた場所のうち何か所かは知っていたので、中山さんの話は実によくわかり、とても興味が持てました。中山さんはこの国際会議でそのころ研究されていた東海層群の古地磁気層序についての研究発表をされましたが、私は別の分科会の会場にいてこの発表を聞くことはできませんでした。ただ昼休みには、会場近くのレストランでいっしょに食事をすることはできました。中山さんは「中華料



【矢田川の足跡化石の写真】

矢田川河床で中山さんが見つけた偶蹄類の足跡化石。足跡の部分、特に蹄の跡が窪んでいる。1990年10月中山勝博撮影。



【INQUAの大会会場前での写真】
北京国際会議センターの前での中山勝博さん。1991年8月河村善也撮影。

理は大好き」と言って、とてもおいしそうにたくさんの料理を平らげていたのを覚えています。中山さんの元気のもと「食」にあったのかもしれませんが。

博士論文

INQUA の国際会議から帰ったあと、中山さんは名古屋やその周辺を含む伊勢湾周辺地域の東海層群の研究を博士論文にまとめる仕事を本格化させていったようです。私の大学時代の恩師でもあり、陶土団体研究グループの結成を最初に呼びかけ中山さんとも親しい間柄にあった藤田至則先生から、当時大阪市立大学へ移られて間なしの熊井久雄先生に中山さんのめんどろを見てやって欲しいとの依頼があったと聞いています。中山さんはその頃、大阪市立大学にたびたび通われて研究を続けておられました。そんなある日、中山さんが博士論文を一応書いたのを読んで欲しいと言って私の所に持ってこられました。その原稿は中山さんがそれまでやってきた研究がまとめられたもので、英文で書かれた大部な原稿だったために、私は何日もかかって端から端まで読み通しました。それを読んで感じたことは、英文がどこでも同じ表現、同じパターンで、あまり英語に慣れていない日本人の書いた英文という感じで、これではとてもダメだと思い、また何日もかかって私なりに原稿を直してみました。中山さんは学生の頃から数学や物理は得意だが、英語は苦手と言っていたので、中山さんに原稿を返すとき、もう少し地学に関する英語を勉強した方がいいよと言っておきました。中山さんは、原稿を読んで丁寧に直してもらえたことをとても感謝してくれたので、私も長い時間をかけて原稿を見たかがあったとうれしく思ったことを今でも覚えています。このときが中山さんの論文の原稿を読む最後になろうとは思いませんでした。

その後、中山さんは持ち前のがんばりと何にでもチャレンジしてみようという前向きな姿勢で英語の勉強をされたのでしょう。その後の中山さんの英語力は急激に向上し、私が原稿を読む必要などまったくなくなってしまったのです。中山さんはこのあとすぐに島根大学に採用されましたが、島根大学の教官をやっていた10年足らずの間に、何度も海外へ調査に出かけ、国際会議や国際シンポジウムにも積極的に参加し、国際誌にも多くの論文を発表するなど国際舞台で活躍してきました。また2000年3月～2001年1月のオーストラリアでの在外研究では、さらに英語力と国際感覚に磨きをかけてこられたのでしょう。英語が苦手と言っていた中山さんのこの変わりようには、ほんとうに目を見張るものがありました。人間は皆、チャレンジする気持ちがなければ向上もない、逆にチャレンジする精神を常に持ち続ければ無限の可能性が開けてくるということを、中山さんは教えてくれたと思います。

まぼろしの泥河湾プロジェクト

INQUA の国際会議のあと、私は日本に留学を希望されていた中国科学院古脊椎動物古人類研究所の金昌柱さんの博士論文の研究指導をすることになりました。博士課程のない私の大学では博士号を出すことができないので、熊井久雄先生にお願いし実質的な指導は私がやることにして金昌柱さんを大阪市立大学の方で受け入れてもらうことにしたのです。私は何年もの間、通いの家庭教師のようにたびたび大阪へ出かけ、またあるときには金昌柱さんに私の大学へ来てもらって研究指導をしました。金昌柱さんの研究指導が山を越し、博士論文完成のめどが立った1996年はじめに、私は中山さんに中国との共同研究のプロジェクトを考えているが、それに協力してもらえないかと持ちかけたのです。プロジェクトを実行に移すためには国際学術研究という種目の科学研究費を獲得しなければならなかったのですが、採択率が低いので私の所と中山さんの所で別々に申請を出し、お互いがそれぞれのメンバーになって少しでも採択率を上げようと考えたのです。中山さんはすぐに賛成してくれました。アイデアマンの中山さんはすぐに「鮮新・更新統泥河湾層（中国）の多次的な層序確立とその国際対比」というテーマを考えてくれ、中山さんを代表者に私や金昌柱さ

ん、その他多くの日本と中国の研究者をメンバーにした申請書類を作成してくれました。その書類は、今でも私のところで大切に保管していますが、中山さんは養護学校や高校の教員をしていたときに発揮したすばらしい事務処理能力を発揮して、この書類をあっという間に作ってくれました。この研究計画の中心になっている泥河湾（ニーホーワン）層は、中国北部を代表する鮮新世～更新世の河成・湖成堆積物で哺乳類化石を多産し、金昌柱さんの研究所の前身である「新生代研究室」にいたフランスの高名な古生物学者 P. Teilhard de Chardin がはじめて本格的に研究して世界的に有名になった地層です。中山さんは 1991 年の INQUA 大会の巡検で泥河湾層を見て、それに大いに興味を持っていたのでしょう。

このときの申請は残念ながら、中山さんの分も私の分も不採択になってしまったので、次の年からは私の方に一本化し、「東アジアの新生代後期哺乳動物群の変遷史の解明とそれに基づく国際対比基準の確立」というテーマにして、中山さんや金昌柱さんたちをメンバーにした申請書類を作成をしましたが、この場合も主な調査地域は中山さんが提案した泥河湾層にしました。このときの申請も残念ながら不採択になり、中山さんの方もその後は島根大学が長年行ってきたヒマラヤのプロジェクトが忙しくなって、泥河湾プロジェクトは日の目を見ないまま、申請を一時中断することになりました。

この間の申請にあたっては、中山さんと何度も議論しましたが、2人で将来のプロジェクトの夢を語り合う楽しい議論でした。中山さんには泥河湾層の向こうに中国の広大な黄土高原が見え、さらにその向こうにはチベット高原やヒマラヤの山々が見えていたようで、それら全体を見渡したスケールの大きな話を私に語ってくれたのは、とても印象に残りました。後から思うと、中山さんにはそのときすでにヒマラヤの向こうにインド洋を隔てて広大なアフリカが見えていたのではないかと思えてなりません。中山さんの夢は名古屋近郊の東海層群から始まって、どんどんスケールが大きくなって、ついにアフリカまで到達したと言ってよいでしょう。最近の中山さんは大柄な体に似合った大きな夢を持っていて、それを実現するために努力されていたと思います。

奥様からの手紙

私が中山さんに最後に会ったのは、2001年の3月のことでした。いつものように中山さんから連絡があって、名古屋に行くので一杯飲みましょうということでした。中山さんと名古屋駅で待ち合わせて、近くの居酒屋で夜遅くまで語り合いました。中山さんはオーストラリアでの在外研究から帰ったばかりだったので、その話を随分聞かせてもらいました。スケールの大きな中山さんには、スケールの大きなオーストラリアの人や自然がよく合っていたのか、本当にすばらしい10ヶ月間だったと言っておられました。この10ヶ月間は、いっしょに行かれた奥様やお子様たちにとっても、とても幸せな日々だったということの後で弔問に訪れたときに、奥様からも伺いました。

弔問に訪れた後、奥様から丁寧なお礼状を頂きました。そこには「主人が兄のように慕っていた河村先生にお参りに来ていただき、主人もさぞかし喜んでいることでしょう」という趣旨のことが書かれていました。この手紙を読んで、私はつい目頭が熱くなってしまいました。中山さんが卒業されて以来500人を超える学生を見てきましたが、中山さんほどの逸材はとうとう一人も現れませんでした。私の大学はと言うとその後よくなるどころか、ますます悪くなって、やる気のある若手教官はどんどん辞めてしまい、今や大学とは名ばかりの「質の悪い職業訓練校」になってしまうことが危惧されています。真の教育・研究をめざし、志半ばにして倒れられた中山さん、その中山さんに兄のように慕われていたとしたら、中山さんの遺志に報いるには中山さんのように真の教育・研究を目指して頑張るしかないと思った次第です。天国の中山さん、安心して、どうぞやすらかにやすみください。

追悼文

中山勝博さんと陶土団体研究グループ

陶土団体研究グループ：塚腰 実*・安藤善之・林 譲治・諏訪 斎・中根鉄信・細山光也・
宇佐美 徹・正木建樹，久保健一，草野高志，城 吉成

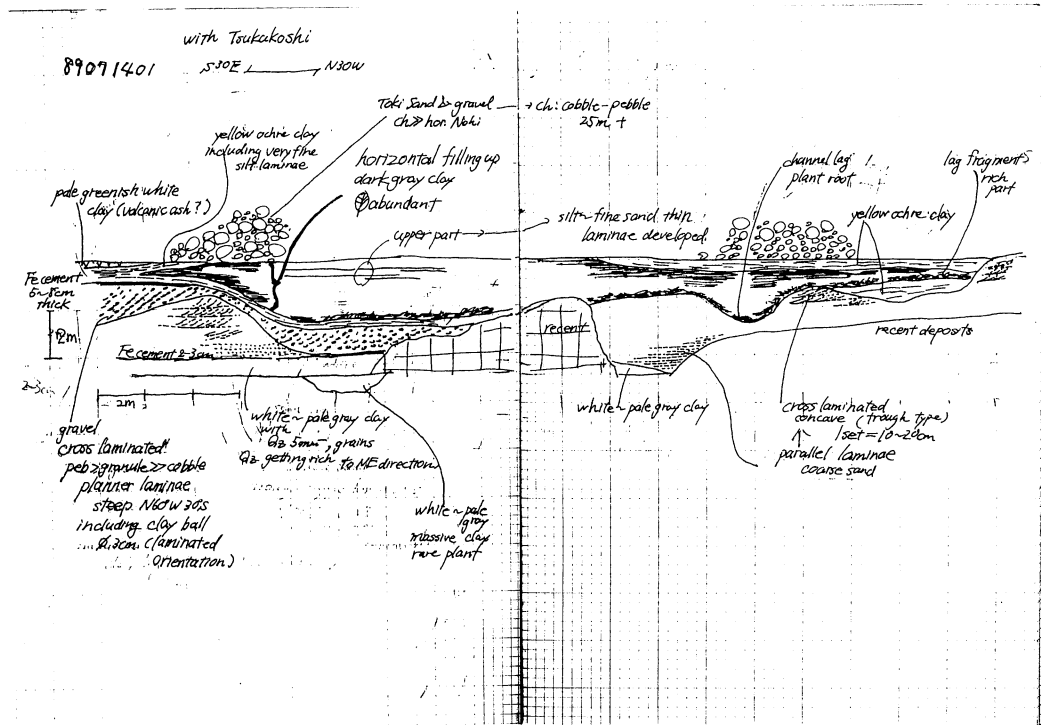
中山勝博さんは、1977年から1999年まで活動した陶土団体研究グループ（陶土団研）に最初から最後まで参加した唯一のメンバーであり、陶土団研の活動をリードするとともに、個人でも東海層群全体にわたり地質層序、堆積環境、構造運動の研究を進め、東海層群の研究に大きな業績を残されました。2001年4月21-22日には、「陶土団研全体の活動は終了するが、今後も連絡しあい研究していこう」と打ち上げ会を行い陶土団研を解散しました。その後、中山さんは2001年8月4日に山形大学で開催された地学団体研究会の総会で会長に就任されました。これからは陶土団研をリードしてくれたように地団研のみならず地質学界もリードしていってくれると期待していました。中山さんが、8月30日、ケニアでの調査中の自動車事故により急逝されたことは、信じがたい出来事でした。

島根大学地球環境資源学科研究報告として「中山勝博さんの追悼号」が発行されるにあたり、中山さんの陶土団研での様子や思い出についてまとめ、追悼としたいと思います。

陶土団研は1977年に藤田至則さんと矢島一昭さんの呼びかけにより発足した研究グループです。「後期新生界の堆積盆地の発生～発達史」を明らかにする大テーマのもとに、23年間にわたり研究活動を行いました。中山さんは陶土団研発足から調査を終了するまですべての期間にわたり調査に参加し、論文作成に取り組みました。陶土団研終了に際して、中山さんは陶土団研の活動をまとめ、地学団体研究会の団研係に報告しており、逝去後、その全文は地学団体研究会の機関誌に掲載されています（中山勝博，2001）。

中山さんは陶土団研が始まった年に愛知教育大学教育学部地学教室に入学しました。学生時代から陶土団研に参加し、藤田さんをはじめとする様々な先生や先輩から多くの事を学び、卒業論文では、愛知県猿投山周辺の東海層群を研究しました。1981年愛知教育大学卒業後、名古屋市の養護学校と高校の教諭をつとめた11年間と1992年から島根大学教官になって以後も、ずっと陶土団研の春、夏、冬の調査、論文作成に参加しました。陶土団研で育ち、陶土団研をリードし、大学教官になってからは、学生も連れて参加していました。

中山さんの専門は地質層序、火山灰層序、堆積、古地磁気など幅広く、高校教師をしていた時でも、地球科学や地質学雑誌に、卒論やその後の愛知県の東海層群の研究をまとめ、多くの論文を発表し、陶土団研の学習会ではその内容を紹介してくれました。卒論をまとめた論文、中山勝博（1987）「愛知県猿投山周辺の瀬戸層群と猿投一知多上昇帯。地球科学41巻」は地学団体研究会の地球科学賞を受賞しています。瀬戸層群が含まれる東海層群は第二瀬戸内累層群のひとつであるため、大阪市大の人類紀自然研究室の門をたたき、古地磁気層序、火山灰層序の研究を進めるとともに、共同研究としても取り組みました。そして、それらの成果をまとめ、1992年に大阪市大で学位を取得しました。高校教師という教育活動で忙しい中、これほど多くの論文を発表し、学位を取得したことは、陶土団研メンバーの励みになりました。団研の調査の際には、露頭に真っ先に到着して、他のメンバーが化石探しに熱中し始めた頃にはひとりで調査やスケッチを終え、「次行くよ、次」という姿が印象的でした。小・中・高の頃は化石少年だったそうで、地学分野に進むのも



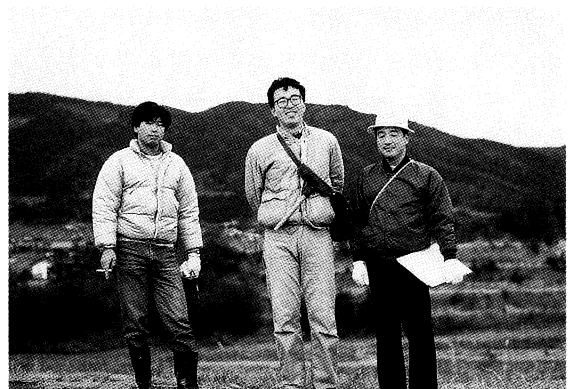
中山勝博さんの岐阜県土岐市土岐口陶土層の調査スケッチ (1989年)。

化石がきっかけと聞いています。東海層群からは多くの植物遺体が産出しますが、化石を探すのがうまく、立派な化石を採集すると、嬉しそうに自慢していました。化石に興味をもったのは、小学校時代の恩師の一人で団研のメンバーである正木さんや中学校時代の理科の先生で植物学者の井波一雄さんの影響があったのかもしれませんが。コンパの際には井波先生の野外観察が多い授業の様子などを懐かしそうに話していました。

中山さんはスケッチがうまく、フィールドノートには、独特のわかりやすい記録が残されています。また、イラストもうまく、巡検案内書や論文には、味のあるイラストが散りばめられ、楽しくて、わかりやすい内容となっています。

陶土団研の1日の調査終了後に、メンバーが地質図作成に苦労していると、大きな背中を丸めて「これでどうだ」と少し自慢しながら楽しそうに地質図を書いていました。調査のまとめの会では、各班の成果発表に対して、鋭い質問や、次の日の明確な目標を示してくれました。その後の学習会では、毎回、新しい地学教材を陶土団研メンバーに発表してくれました。陶土団研のメンバーは、小・中・高の教師が多かったため、地学教材の紹介を毎回楽しみにしていました。中山さんが外国へ調査へ行った際には、スライドで調査の様子を紹介してくれたり、大学教官になってからは、大学での講義のエッセンスを紹介してくれました。陶土団研のメンバーにとって、中山さんの話を聞いたり、議論することは、楽しく学べるひとときだったと思います。

陶土団研では、調査結果を確実に論文をまとめていくことができました。それは、中山さんのリードによるものです。中山さんは高校教師時代から常に「研究成果はいち早く公表するべきである」と言っており、メ



恵那地域を調査している頃の中山勝博さん(中央)。左：宇佐美 徹さん、右：中根鉄信さん。(1988年1月、陶土団研冬の調査)

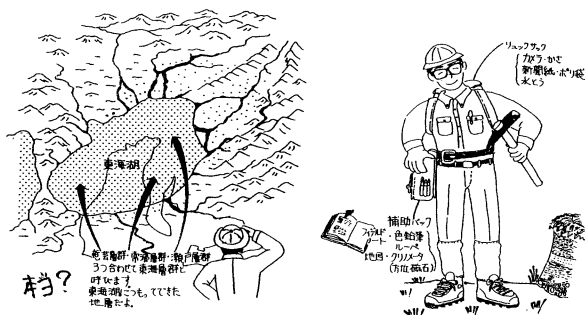
瀬戸層群の 堆積相をみよまい

巡検の手引き

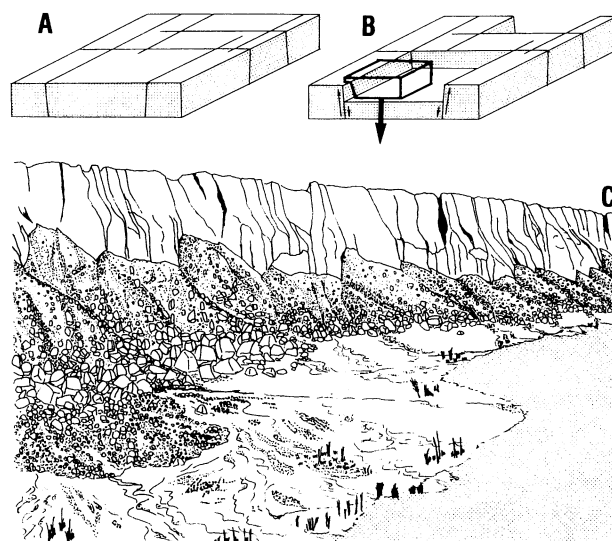
1990年7月14日(土)～7月15日(日)

＝目次＝

・(巡検の案内のリアプリント)-----	1
・東海湖と東海層群-----	3
・東海層群(瀬戸層群と常滑層群)の火山灰層序-----	4
・東海層群の古地磁気層序-----	6
・各露頭のスケッチ-----	7
・陶土層にみられる堆積相-----	16
・各露頭の位置(1/2.5D)-----	21
・コース生体図-----	22



中山勝博さんが作成した巡検案内書の表紙。右下のモデルは中山さん自身と思われます。



中山勝博さんが書いた陶土層堆積初期の復元図(中山勝博・陶土団体研究グループ, 1989, 第8図C, A:瀬戸層群(陶土層)堆積直前, B:陥没盆地の形成, C:陶土層堆積初期における堆積環境復元図)。この復元図は粘土鉱山にあった小型の崖錐を写真撮影し, それをもとに作成したと聞いています。

ンバーを引っ張って陶土団研の研究成果を論文にまとめていきました。陶土団研の論文の多くは, 中山さんの存在無くして世に出ることは無かったのではないかと思います。「なぜこの地域を調査するのか, 具体的な目標は何か, 調査の結果をどのようにまとめるか」などの議論を常にリードしてくれました

た。そして, 中山さんが事務局をしていた1981年～1992年には, 調査結果や議論の結果を陶土団研機関誌「ガラガラ」にまとめ, 次回の調査の案内に次回の課題とともに掲載してくれました。団研で論文をまとめる際には, 中山さんが露頭スケッチや柱状図, 論文に載せるインデックスマップに至るまで, 独特の美学をもった図の原稿を準備し, それをもとに宿泊検討会を開き, 地質図や地質断面図の仕上げ, 論文の原稿を検討しました。論文の内容を議論している時は, 的確にまとめてくれ, 話している内容がそのまま論文原稿になるような論理的に話し方でした。

中山さんは, 私達陶土団研のメンバーに多くの事を与えてくれました。陶土団研は1999年で一応の活動に終止符を打ちましたが, メンバーそれぞれが中山さんの研究や教育に情熱を傾けられた姿勢に学び, 今後の活動に活かしていきたいと思っています。

ご冥福をお祈りします。

引用文献

中山勝博(1987) 愛知県猿投山周辺の瀬戸層群と猿投一知多上昇帯. 地球科学 41, 114-130.

中山勝博(2001) 陶土団体研究グループの活動報告. 地学団体研究会機関誌そくほう No.562, 中山勝博会長追悼特集号, 6-7.

中山勝博・陶土団体研究グループ(1989) 岐阜地方の小陥没盆地と陶土. 地団研専報 36号, 237-246.

中山勝博君を偲んで

塚 腰 実*

私が大学を卒業して岐阜県の高校教師となった時、中山君は名古屋市の高校教師をしており、陶土団体研究グループの事務局を担当していました。私は東海層群の大型植物化石を研究したいと思っていたので、1985年夏から陶土団研の調査に参加し、中山君とのつきあいが始まりました。同学年で同じ高校教師、東海層群を対象とした研究をしているということもあり、中山君から研究の進め方、生き方について多くの刺激を受けました。島根大学総合理工学部地球資源環境学科の研究報告として「中山勝博先生追悼号」が発行されるあたり、中山君の思い出と業績を記し、追悼としたいと思います。

高校教師には教科指導、部活動の指導、生徒指導、校務などたくさんの仕事があり、テーマをもって研究するのはたいへんですが、中山君は教師という職業に就きながら、東海層群の研究に活発に取り組むと同時に、本業である校務や教科についても全力投球で取り組んでいました。教材研究は地学に限らず、物理、天文分野にもおよび、調査の際に会うと、楽しそうに教材研究の成果を解説してくれました。部活動の指導と天文分野の教材研究に関しては、「プラネタリウム製作の指導」(地学教育 42 巻 27-36, 1989 年)という論文を発表しています。その内容は、天文部の活動を充実し、プラネタリウムの製作を通して部員の知識を向上するために、極軸の角度を自由に設定し、地球上のどの地点をとっても、そこからの夜空を楽しめるようなピンホール式プラネタリウムの製作指導をしたというものです。地質学ばかりでなく、物理や天文の計算も得意で、物作りが好きな中山君ならではの論文だと思います。また、中山君は生徒会担当の責任者もしていました。名古屋市の高校では各部の部長を互選で選ぶシステムが残っており、20代後半の中山君が生徒会部長に選ばれたのは、同僚からの信頼と期待があったのであり、中山君もやりがいをもって取り組んでいました。たびたび生徒会活動の様子についても話してくれましたが、愚痴はいっさいなく、活発な企画の紹介をしてくれ、同じ高校教師として刺激的な内容でした。生徒会活動の指導を通して、全校生徒を組織しているように見えました。

このような高校教師時代の教材研究、部活動や生徒会活動の指導は、大学教官になってからのわかりやすい講義の工夫や研究室の学生と研究テーマに取り組むことへつながっていったように思います。大学教官になってからは高校教師時代の経験を活かして、学生に実験やわかりやすい実例を示しながら、学問の内容と面白さを伝えようと情熱的な講義をしていたと思います。見せてもらった堆積学の講義のプリントは教科書のような状態まで整っており、将来、これまでにない教科書を執筆してくれるだろうと思っていました。また、中山君は、研究者としては当然なのですが、研究成果をいかにわかりやすく伝えるかという、発表技術の工夫にも熱心でした。論文の図や表の作成においては、効果的なわかりやすい図を考え出していました。国際誌から情報を得ると同時に、自ら工夫や考案をしていました。また、島根大の教官採用の面接では、地層の剥ぎ取り標本を持参し、自分の考えを述べたと聞いています。中山君が研究室の学生と親しく、楽しく、ある時は教育的で厳しく接する様子を見ていると、私がもう一度学生時代に戻れるならば、中山研究室へ行ってみたいと思うほどでした。中山君自身も学生達と楽しみながら、研究と教育を行っていました。

中山君は愛知教育大学卒業後、大学院へは進まず、地元に残って東海層群の研究を続けていく道を選びました。陶土団研のメンバーとして団体研究をまとめていくとは別に、愛知教育大学での卒論を地球科学に投

稿し、学会賞である地球科学賞を受賞しました(愛知県猿投山周辺の瀬戸層群と猿投一知多上昇帯, 地球科学 41 巻 114-130, 1986 年)。学生時代から陶土団研の論文作成に関わり、卒業後は論文作成の中心になっていましたから、テーマ設定-調査-論文作成-投稿-査読者とのやりとり-受理-印刷という過程を体験し、その過程の面白さ、論文が完成した時の喜びを味わっていたのだと思います。卒論をまとめた頃から、堆積相解析、火山灰・古地磁気層序というテーマを設定し、東海層群の研究に打ち込んでいき、卒論をまとめた論文の 5 年後に発表された「瀬戸市北部の新第三系瀬戸陶土層の堆積過程」(地質学雑誌 97 巻 945-958, 1991 年)は、それまで湖成層と考えられていた瀬戸陶土層が河成層であることを明らかにしました。堆積相解析の考え方を学び、地元の地層の解析に導入した成果です。

中山君は、東海層群をなぜ研究するのかという世界的および地域的な位置づけ、何をどのように研究すべきか、どの地域を研究すべきかについてきっちり考えていました。様々な分野の研究を展開できたのは、古地磁気測定技術を習得するために大阪市立大学地学教室へ休みを利用して通ったり、学会や研究会に参加し堆積学の知識や考え方を学ぶなど活発な行動力によるものです。自分の調査地域で地質巡検を企画し、他地域から研究者を呼んで、自分の研究成果を野外で議論する機会もつくっていました。中山君は先輩後輩に関わらず活発な議論を行い、周りの人を巻き込んで活発に研究していました。

大学卒業から高校教師時代の研究をまとめる段階では、定時制高校へ赴任し、昼間は調査やデータのまとめを行い、学位論文としてまとめていき、島根大学赴任後すぐに大阪市立大学で学位を取得しました。高校教師をしながら研究成果をまとめ学位を取得したことはすごいとだと思います。その実績が認められて、中山君が大学教官になったことは、研究と教育においてさらに活躍できる場を得られてよかったと思いました。

中山君は研究の位置づけをしっかりとっていたため、自分の研究に自信をもっていました。科研費の申請の際には、「こんな面白い研究に科研費が付かないはずがない」と言っていました。その位置づけにもとづき、着実にデータを積み重ねてまとめ、論文に仕上げていきました。世界的な位置づけまで考えているので、国際誌に論文を発表するのは当然のように、どんどん論文を発表していきました。研究の方向性について「フィールドで勝負したい。フィールド調査により様々なモデルを提唱したい。これまでは東海層群を研究してきた。これからは東海層群を使って、様々な現象の研究をしたい。」と今後の展望を語っていました。ケニアでの調査も新たなフィールド調査への挑戦だったのでしょう。研究テーマも卒論生や大学院生と取り組んだ植物化石のタフォノミー、オーストラリアで行った植物が河川の流れのさまたげとなって形成されるオブスタクルマークの研究などさらに拡がりました。

中山君はテーマの設定、論理展開などを明確にしていたので、論文をまとめるのがとても早かったです。計画通りに実行するために、締め切りには徹夜をしても、必ず原稿をまとめていました。共同研究をしていた際、私の担当原稿が遅れると「締め切りに間に合わないのは、計画がいけないんだ。」ときつく言われました。厳しい事も言われましたが、博物館の状況を理解していないのではなく、職場の状況を言い訳にしてさばらないように、締め切りをせつについて、研究成果まとめさせてくれたのだと思います。私の専門である植物化石の成果が思うように出ないときは、古植物学の中でも研究者によりそれぞれ得意分野があるだろうから、得意分野を伸ばすように励ましてくれました。

研究に熱中してしまうと、家族サービスはないがしろになりがちですが、中山君は家族の事もしっかり考えていました。考えるだけでなく、すぐに実行するところが中山君のすごいところ。職場と住居を接近させるために、島根大学に赴任してすぐに、研究室から歩いて数分の、大学の裏に自宅を購入しました。大学で遅くまで研究する時も、夕方自宅にもどり家族と食事をしてから再び大学へ出勤すると言っていました。また、土曜日は仕事をするが、日曜日は基本的に家族と過ごす日としていて、釣りへ行き、帰りに温泉へ立ち寄るなどと言っていました。そんな中山君を見習いたいと思っていました。

中山君とこれからもいっしょに研究したかったのですが、かなわぬ事になりました。思い出はつきませんが、中山君の研究や生き方に学び、東海層群の研究を続けたいと思います。

ご冥福をお祈りします。

中山勝博先生を偲んで

實 吉 玄 貴*

中山勝博先生はケニヤ時間の8月30日にこの世を去られました。その日、私は帰国される予定であった中山先生をナイロビに送り届けるため、先生と同じ車に同乗していました。

その日の朝、中山先生は無事調査が終わった充実感と日本でご家族に再会できるという喜びから、とてもリラックスされている様子でした。そして、今でも信じられないようなあの事故が起きました。中山先生と一緒に病院に運ばれ、病院で医師から中山先生の死を伝えられた時、私はその事実をただ受け入れられませんでした。今でも夢であってほしいと願っています。

私が中山先生から初めて直接指導を受けたのは、大学3年生の後期からです。英語が出来ない私に、『大学院を志すのなら英語が出来なければ駄目だ』と強い口調で語られ、毎晩遅くまで、セミナーの課題である英語論文を一行ずつ訳していくという気の遠くなるような指導をして下さいました。卒業論文では、先生が長年研究されてきた東海層群において、植物化石が河川堆積物中に運搬・堆積される過程を堆積学的に議論する研究を行い、その中で陸成堆積物の見方や定量的な堆積学の見地を教えてくださいました。修士論文ではアフリカ・ケニヤのリフト堆積物の堆積過程を議論するため、45℃にもなる環境の中で2人とも汗だくになりながら地層を観察し、地層から読み取れるリフトの活動を露頭の前で議論していました。このような野外調査の中で、中山先生は地層が物語る過去の出来事を生き生きと語り、我々学生に地質学におけるフィールド活動の大切さと困難さを、自らが言う『フィールド・ジオロジスト』という生き方として教えてくださいました。中山先生と露頭の前で議論するといつも私は論破されてしまいましたが、それも結局はフィールド・ジオロジストとして、私をより高いステージに導いてくれるための指導だったと思います。

私は中山先生から学問だけでなく人間としても学ぶことが多かったと思います。『お前は10年後に何をしているのだ』というのが、中山先生の口癖でした。10年後の自分を想像し、その将来像に少しでも近づくため、次の10年を真剣にそして戦略を持って生きる、という強いメッセージが込められていると認識していました。そして具体的な答えを出せない私に、『だからお前は弱いのだ。いいか、戦略性を身に付けるのが今のお前の課題だ』と何度も重ねて指導されたのを覚えています。これらの指導は、今の私にとって、地質学をどのように研究し、今後どのような人生を生きていくかを考える核となっています。

中山先生は私にとって最も信頼できる師であると同時に乗り越えたい目標だと思っています。そして自分の地質学的な理論が中山先生のそれを凌駕できた時、私は一人前の地質学者になれると信じています。先生の歩かれたフィールド・ジオロジストとしての意思と夢は、先生に愛を持って指導していただいた我々学生が継いでいくべきだと思います。

最後に、私の人生をより豊かにして下さった中山勝博先生に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。中山勝博先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

中山勝博先生の思い出

会 下 和 宏*

私が、中山勝博先生と最初にお会いしたのは、1994年の夏に実施していた大学構内北部の島根大学構内遺跡第1次発掘調査（現第2体育館）の際であったと思う。

この調査区は、縄文時代早期末～中期初頭（一般的には約6500年前～約5000年前頃）の「古宍道湾」水辺に相当しており、多数の縄文土器・石器や丸木舟状木製品等が出土していた。また、シルト質海成層、泥炭層、厚さ約2cm程のアカホヤ火山灰層等をはじめ、調査区一帯を覆う斜行堆積の河川成砂礫層（第1次調査区第6層）等が検出されていた。

中山先生が発掘現場に訪れられたのは、この河川成砂礫層に注目されてのことだった。先生のご説明によれば、比較的、短期間のうちのイベントで堆積したとのことで、さらに「縄文海進中に高低差1.6mの小海面低下事件が起きて形成された可能性」を示された。この時の地質学的調査によるレポートは、「島根大学構内遺跡にみられる側方付加堆積物」（『島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅰ（橋縄手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年）で報告されている。

宍道湖・中海周辺における縄文早期末から前期前半は、遺跡数が比較的増加する点で注目されてきた時期である。古環境の面からも、アカホヤ火山灰降下、照葉樹林帯への変遷とあわせて、「縄文海進」による水環境の変化は看過できない現象で、これらの詳細な復元は、生態環境に高く適応した縄文文化の展開と特質にアプローチするうえでも重要な課題となる。

こうしたなかで、中山先生がご指摘された、縄文前期初頭における一時的な海面低下とこれに伴う水辺環境の変化は、当該期の古宍道湾における水産資源のポテンシャルと人類遺跡形成との関係を考えるうえで、注目される成果となった。

また、大学構内南部の島根大学構内遺跡第7・8次調査（現総合理工学部3号館）では、縄文後～晩期頃（約4000～2300年前）に形成されたとみられる砂洲が検出された。この砂洲の断面を観察すると、細粒砂中に厚いシルト質のラミナと薄いラミナが、規則的におり重なって挟在する現象が認められた。中山先生に伺うと、潮汐差に起因した水深の変化で生じた現象の可能性があるということであった。ラミナの方向から、砂洲は、大学本部棟側から総合理工学部棟側へ伸長したことが判明し、こうして閉塞された大学構内をはじめとする川津一帯の低地は、やがて山陰地域でもいち早く弥生時代の本格的な水稲農耕文化を受容するうえでの適地となる。

中山先生とは畑違いにも関わらず、度々、発掘現場に来て頂き、地質学的な見解をご教示頂くなど、色々とお世話になった。あの、お元気で体格の立派な先生がお亡くなりになられたということが、今でも信じることができない。私としては、せめて発掘調査を通してご教示いただいたことを今後の調査研究に活かしていくことで、僅かでも学恩にむくいていけたら……と思う次第です。

謹んでご冥福をお祈り致します。

*島根大学埋蔵文化財調査研究センター